

## 北海道における戦後の児童出版物

—1945年から1950年まで—

谷 暎 子

### はじめに

北海道が出版王国と呼ばれていた時代があった。1945年から1950年までのおよそ5年程のことである。札幌を中心とした出版界の活況のなかで活躍した出版社と、“札幌版”と呼ばれる出版物について、近年関心もたれ調査研究が行われるようになってきた。しかし、戦後50年になろうとする現在も、その全容の解明には至っていない。

この期の出版物調査の最大の隘路は、資料となる出版物が手に入りにくいことである。地元の図書館にも収集・保存されていないことが多く、研究のためには出版物の探索から始めなければならない。特に、児童出版物は、図書館でも収集の対象とはならなかったし、家庭では子どもの成長と共に処分されることが多いからである。

出版界の活況は短期間のことであったが、多様な児童出版物が相当数刊行されている。筆者はここ5年程、この期の児童出版物の探索・調査を続けてきた。戦後の新しい時代の歩みと重なるこの期の出版物の調査・研究は、北海道の児童文学・文化史研究にとって大きな意味をもつと考えたからである。敗戦後、児童出版物がどのような出版状況、社会状況の中で刊行されたのか。どのような種類の出版物が、どのような人々によって創られたのか。どのようにして子どもたちの手に渡り、子どもたち自身はどのように感じ、考えていたのか、知りたいことばかりである。

しかし、前述したように資料の探索には、大変な時間と労力を必要とする。道内の図書館はもちろんのこと、国立国会図書館、大阪国際児童文学館、日比谷図書館などにも通った。古書店巡りも探索に欠かせないが、児童出版物の場合は滅多に巡りあえない。加えて50年を経た今、出版に携わった人々を探することは極めて難しい。執筆者やその家族を探し訪ねては、資料を見せていただく旅は今も続いている。これまでおよそ100人をこえる方達にご協力いただき、ここまで辿り着くことができた。

これまでの調査の結果は、日本児童文学学会、日本子どもの本学会、北星学園女子短期大学紀要等に発表してきた。

この小論では、これまでの探索・調査に基づき、1945年から1950年までに出版された児童出版物の実態を明らかにし、この期の児童出版物の特質を探りたい。

### 1. 札幌を中心とした出版状況

出版活動がいかに盛んであったかを知る手がかりの一つは、当時の出版社数であろう。『昭和22年北海道年鑑』（北海道新聞社）によると、1945年7月には十指に満たなかった出版社が1947年7月には107社となっている。この2年間の躍進ぶりには目をみはるが、ピークの1948年には127社を数えた。

この活況は、外的な要因によるところが大きい。第1に、出版の中心であった東京は、

激しい空襲により出版能力の7割を失ったといわれている。『資料年表・日配時代史』の「第3部年表」には、出版社、印刷・製本工場等の戦時下の状況が詳細に記されている。

1945年5月25日の項には、「東京大空襲により共同印刷、中外印刷はじめ、印刷、製本、出版業者、書店等の被害甚大、出版業界は壊滅状態となる。」(注1)とある。日本出版会が空襲対策委員会を発足させたのは1945年1月のことで、長野県、九州、北海道等に疎開が行われたが、札幌に出張所を開設したのは講談社(のちに北海道支社)であった。

敗戦直後の出版界については、次のように記されている。「戦災により全国の印刷設備の約43%が被害を受けており、企業数では全国の47%の被災率。(中略)企業整理と戦災により失った生産力は約60%といわれる。とくに罹災率は東京が高く66.5%、神奈川県は59%、大阪、兵庫は共に60%近くあって復興は容易ならじと思われた。」(注2)と。

こうした状況の中で北海道がクローズアップされたのは、物的条件——用紙の原産地であり、戦禍が少なく操業可能な印刷工場があったからである。

講談社のほかに札幌で出版活動を始めたのは、筑摩書房、鎌倉文庫、青磁社、創元社等である。こうした出版社の出版活動に刺激され、地元の人達による小出版社が次々と誕生し、空前の出版社数を記録することとなった。

第2に、敗戦直後の読書界の急激な需要があったことも見逃せない。戦時下で言論統制が長く続いた後のことである。『日本出版文化史』には、「一般読者は、終戦でほっとすると同時にまず、楽しい読みものを求めた。心の灯となるような思索書を求めた。やがてまた戦時中に禁止されていた自由主義者の著述や左翼的社会思想物を求めた。まことに必然のことであろう。」(注3)と述べている。

こうした需要に依拠し相次いで出版社ができ、活況を呈したといえよう。

第3に、戦禍を逃がれて疎開してきた作家、画家、出版社の疎開に伴う異動で来道した編集者等、人的条件に恵まれたことも指摘できよう。

出版界の活況を象徴するような催しが、1947年5月末から6月上旬にかけて行われた。北海道出版文化祭である。主催は日本出版会北海道支部で記念講演会、出版文化展覧会、読書週間、記念出版と多彩な行事が展開された。なかでも、記念講演会のパネルディスカッションは、文学に関心を持つ市民の大きな期待を集めたという。講師として来道したのは、柳田国男、長谷川如是閑、河上徹太郎、小林秀雄、田中美知太郎、久米正雄、中谷宇吉郎、亀井勝一郎、川端康成で「東京の文壇が空になった」と噂されるほど、豪華な顔ぶれであった。

しかし、この活況もそう長くは続かなかった。予想より早かった東京の復興で、疎開出版社が次々に札幌を引揚げたこと。ストックの用紙が出つくした後の紙不足、出版物の売れよきの急速な落ち込み等で1949年には出版社も62社に激減している。

## II. “札幌版”と呼ばれる出版物

この期に出版された出版物は、“札幌版”と呼ばれている。北海道出版文化祭を記念して編まれた『北海道出版物総合目録』は、“札幌版”を知る有力な手がかりとなる。28頁ほどのこの冊子には、「書籍目録」、「雑誌目録」、「出版社一覧」が記載されている。

1945年7月から1947年5月までに出版された(出版予定も含む)書籍は、2年間に40社およそ300冊を数えるし、78種もの雑誌名が記録されたいて、その多さに驚かされる。数

の多さもさることながら文芸、教育、思想、宗教、経済、労働、農業、水産、医学、映画、マンガ等、内容も多様で、女性、子どもを対象にした雑誌も含まれている。

多くは新設出版社から出された無名誌であり、いわゆる3号雑誌で終わったものが多いようだ。現在と違って、1冊の雑誌を作ることは、原稿の依頼、編集、用紙の調達、印刷・製本の技術等、どれをとっても容易なことではなかったはずである。外的要因が強かった活況とはいえ、この目録をみると敗戦後、読書要求に応えようとした出版人の情熱のほとばしりを感じることができる。

福島鑄郎は『雑誌でみる戦後史』に、「日本の雑誌出版史の中で、その解明が最も困難な時期は戦後である。」(注4)と述べている。生まれては消えていった無名の出版社の記録は皆無に等しいし、無名誌の多くは収集・保存されていないからでもある。

しかし、短期間とはいえ次のように評価されている雑誌が創られていたことにも、目を向けなければならない。随筆誌『北方風物』(北日本社)、詩と評論誌『至上律』(札幌・青磁社)、『日本未来派』(札幌・日本未来派発行所)、日本の民主化への啓蒙書として発行されたという『思想問題研究』(小樽・新星社)、戦中廃刊に追いやられ1948年に復活した『北海教育評論』(北海教育評論社)、家庭雑誌『ばとん』(子供の国)、女性誌『北の女性』(愛別村・北の女性社)、児童文芸誌『北の子供』(新日本文化協会)等が挙げられよう。

もう一つ、当時の出版物を知る手がかりとなるのは、北海道立図書館北方資料室の「代田文庫」である。500冊余の当時の出版物は、古書店尚古堂の二代目・代田茂の寄贈による貴重なコレクションである。代田茂は古書店を営みながら、北日本社(後に北方書院と改

称)を興し、活発な出版活動を続けた人として知られる。また、日本出版協会北海道支部長も務めていた。1949年にはそうした出版活動の功績が認められ北海道文化奨励賞を受賞している。このコレクションには、およそ50冊の児童出版物が含まれている。

この期の出版物を概観すると、あらゆる分野の出版物が出されていたことがわかるが、特徴的な点は次の通りである。

第1に、最も多いのは、文学関係の単行本、文芸雑誌等であること。

第2に、農業、畜産、水産関係等の専門書、実用書が目立つことである。戦中の荒廃と戦後の冷害等もあって、北海道は食糧基地として期待されていたことも関わってしよう。

第3に、多様な児童出版物——新聞、雑誌、絵本、童話、実用書、紙芝居、カルタ等が出されていたことである。

第4に、出版ルートには乗らなかった職場や労働組合の文芸誌や中学・高校の校友会誌等である。相当数にのぼるこれらの出版物からは、活発な文化・創造活動を可能にした当時の社会状況が解明できるに違いない。

出版ルートに乗らないこれらの出版物を所蔵するのは、米国・メリーランド州立大学マッケルデン図書館・プランゲ文庫である。GHQ(連合軍総司令部)は、1945年10月から1949年秋まで、新聞、放送原稿の事前検閲、出版物の事後検閲を行っていた。当時、メリーランド大学の教授で、GHQの戦史課長でもあったゴートン・W・プランゲ博士は、これら検閲資料を本国へ持ち帰り、後にメリーランド大学に寄贈・保存されている。日本では現在見ることでできない、あらゆる分野の出版物が保存されており、日本戦後史資料の宝庫といわれている。

1990年の8月、北海道新聞に「終戦直後の道内出版物大量に発見」の記事が掲載された。

当時、北海道新聞ワシントン支局の記者だった児玉芳明氏（現・道新スポーツ社々長）の調査による貴重な報告で、北海道の人々の知るところとなった。児玉氏にいただいた雑誌のリストを見て驚いたのは、前述したサークル等の機関誌、同人誌の多さである。当時の出版物の研究には、出版ルートに乗らなかつ

た出版物の解明も今後の課題となろう。

### Ⅲ. 児童出版物

表1は、現在までに確認できた出版社別の児童出版物点数である。単行本は41社120点、他に新聞12種（9社）、雑誌5種（5社）、が

表1 出版社別児童出版物数 (1994.11)

地域	出版社名	出版数	備 考	
札幌	朝日新聞社	(1)	雑誌「こども朝日」—北海道版	
	エルム社	20	絵本出版。梁川剛一・塚本長蔵の絵本 賀川豊彦・平沢定治の絵本	
	霞ヶ関書房	1	グリーン・ブック1	
	北日本社 (北方書院)	3(1)	雑誌「ひばり」	
	希望生活の会出版部	1		
	玄文社	11	山田義夫と加藤愛夫、小田邦夫の絵本	
	現代評論社	1		
	子供の国	4(2)	新聞「子供の国」「こどものくに」—幼年版 原田三夫の科学読み物	
	札幌講談社	12	再刊本が多い	
	札幌青磁社	2		
	新北海新聞社	(1)	新聞「新北海中学生新聞」	
	新日本文化協会	9	雑誌「北の子供」。梁川剛一の紙芝居	
	新日本教育社	2		
	自由建設社	5(1)	雑誌「おはなし」。おはなし文庫5	
	談論社	2		
	千代田書院	(1)	雑誌「北海道小学生の自由研究」	
	帝都出版社	1		
	ともだち社	(1)	新聞「ともだち」	
	どんぐり社	1		
	毎日新聞社	1		
	白鳥社	3	白鳥文庫3	
	白都所部	1		
	文教出版社	1		
	北桜社	3	中村篤九の絵本	
	北海写真新聞社	(2)	新聞「子供写真新聞」「こども写真新聞」	
	北海評論社	1		
	北海道教育評論社	8	小学校の副読本。北教組札幌支部文教部の脚本集	
	北海道教育文化協会	2	少年少女のための時計台文庫2	
	北海道新聞社	(1)	新聞「少年少女北海道新聞」	
	北海道出版社	2	梁川剛一・椿達彦の絵本	
	北東日本厚生協会	1	山田義夫と林良応の絵本	
	北方出版社	5		
	北方民生協会出版部	2	太陽文庫（北海道教室文化連盟）宮津博（劇団東童）脚本集	
	小樽	小樽新聞経営K K	(1)	新聞「北海道コドモ新聞」
		新屋社	8	
	旭川	太陽堂	4	理科童話
	室蘭	北の友社	(1)	新聞「北の友」
		北海道少国民新聞社 (北海道小学新聞社)	(1)	新聞「北海道少国民新聞」(北海道小学新聞)
		室蘭児童文化協会	2	北教組室蘭支部と提携
		最上谷書店	1	
北見	グリム社	(2)	新聞「仲良しウィークリー」「なかよし・こよし」	
	41	120		

\* 出版数の( )は、新聞、雑誌の種類

確認できた。前述した『北海道出版物総合目録』に記載されている出版社は108社で、うち「出版部門」の項に“児童”と記載されているのは12社である。実際に児童出版物を手がけた出版社は41社で、ピーク時の127社の3分の1にあたる。

児童書を専門に出版していたのは2社で、絵本を中心に出版したエルム社と、科学絵本、読み物、新聞を出版した子供の国である。他に、児童向きの出版に力をいれていたのは、児童文芸誌『北の子供』や紙芝居を出版して

いた新日本文化協会であった。

次に、児童出版物をジャンル別に取りあげ、その特徴をみたい。

### 1. 子どもの新聞

発行された新聞は、表2の通りである。道内——札幌、小樽、室蘭、北見で12種類の新聞が子どものために刊行されていたことに驚く。しかし、確認できた新聞は、表2で見ると、ごく僅かにすぎない。図書館にも、現存する新聞社にさえ保存されていないので

表2 新聞一覽 (1994.11)

地域	新聞名	編集者・発行者	発行所	発行年月
札幌	ともだち	横田初吉 (1~30、33~38号)	ともだち社	1946, 2, 1 ~1946, 9, 6
	子供の国	塚原 (76号・1948,6,20)	子供の国	1946?~1949?
	こどものくに -幼年版-	井口幸治 (62号・1948,6,7)		1946?~1949?
	子供写真新聞 (高学年用)	佐野四満美 (11号・1948,6,25)	北海写真新聞社	1948?~?
	こども写真新聞 (3年以下)	佐野四満美 (7号・1948,5,15) (8号・1948,5,25)		1948?~?
	新北海中学生新聞	谷 幸吉 (3号・1949,1,26)	新北海新聞社	1949, 1~?
	少年少女北海道新聞	松本留吉編集 藤木義雄発行 (59号・1950,3,6)	北海道新聞社	1949?~?
小樽 室蘭	北海道コドモ新聞	?	小樽新聞経営KK	戦前?~1948?
	北海道少国民新聞 (北海道小学新聞)	荒関政太郎 (3号・1946,8,10) (5号・1946,10,10)	北海道少国民新聞社	1946?~?
北見	北の友	代表・場崎喜美 幸松 健	北の友社	1646?~?
	仲よしウイークリー	得永虎男 (5号・1949,10,8) (10号・1949,11,15)	グリム社	1949?~?
	なかよし・こよし	(6号・1949,11,6) (8号・1949,11,16) (10号・1949,12,14)		1949?~?
	12			

\* ( ) は確認できた号

ある。子どもの新聞は、児童出版物のなかでも最も探索が難しいのものであることを物語っているといえよう。

戦前から刊行されていたのは、小樽の『北海道コドモ新聞』だけで、他は戦後の創刊である。12種の新聞をみると、1946年の創刊と、1948年の創刊のほぼ二つの時期に分かれていて興味深いが、後半のものは高学年向きが多い。

これらの新聞のなかで、ほぼ全号を探索できたのは、『ともだち』である。1946年2月1日創刊、半年後の9月6日の終刊である。発行はともだち社、編集発行印刷人は横田初吉と記載されている。横田初吉は印刷所の経営者で、『ともだち』創刊のためにともだち社を設立したという。しかし、実際に編集を担当していたのは4人の小学校教師・境盛男、鈴木善男、高田英男、伊藤恵であった。月6回の発行であったが、発行部数の記録はないのではっきりしない。その他、詳細については拙文(注5)を参照してほしい。

調査の過程で、童話新聞『ともだち』終刊後に、同名の家庭宗教新聞『ともだち』が発行されていたことがわかった。童話新聞『ともだち』の題字がそのまま使われていて、驚かされた。当時の出版状況がよく現れている出来事ともいえよう。この新聞は横田初吉と、その友人である住職・樽本成美が発行していたものである。曹洞宗円照寺の檀家に配布され、1950年頃まで続いたようだが終刊時期ははっきりしない。執筆には、口演童話家・塚本長蔵も加わっていたという。

新聞のなかでユニークなのは、『子供の国』である。財団法人・子供の国の発行で、札幌に疎開していた科学ジャーナリスト原田三夫の責任編集であった。当時、編集に携わっていた井口幸治氏によると、北海道大学理学部の先生たちが執筆に協力していたという。原

田三夫は『思い出の七十年』に「子供向きの月刊科学新聞」(注6)と書いているが、実際には旬刊であった。創刊は1946年5月1日、続いて7月頃に幼年版『こどものくに』を創刊。プランゲ文庫所蔵のものから推測すると、1949年春頃まで続いたようだが終刊時期は今のところわからない。

新聞については、表2でもわかるように探索できたものが極めて少ない。従って、内容の検討等は、プランゲ文庫での調査をまたなければならぬ。

## 2. 児童雑誌

雑誌は、表3のように5種刊行されていた。児童文芸誌『北の子供』(新日本文化協会)、童話雑誌『おはなし』(自由建設社)、『ひばり』(北日本社)、週刊誌『こども朝日』北海道版(改称前は週刊少国民)、そして『北海道小学生の自由研究』(千代田書院)である。

この期の代表的な雑誌は、内容的にも発行部数からみても『北の子供』であろう。1946年4月の創刊で、およそ4年間北海道の子どもたちに親しまれた。戦後、東京で出された『赤とんぼ』(実業之日本社)『子供の広場』(新世界社)と同時期の創刊で、『銀河』よりも早かったわけである。しかも、それらが廃刊になった後、札幌で1950年1月まで続いたことは、驚くべきことである。新日本文化協会の発行で、発行部数は最盛期で1万5千といわれている。発行人は佐藤信一だが、3号から終号までは須田多四郎であった。編集人は2～6号まで和田義雄で、のちに、大野謙次、桜井志郎、名達修治と3回変わっている。童話、童謡、評論、北海道の自然、作文や詩の投稿欄等、多彩な内容。執筆者も表4のように道内の作家はもちろんのこと、疎開で北海道に移住していた作家、中央で活躍していた作家も加わり豪華な顔ぶれである。これま

表 3

確認できた雑誌一覧

雑誌名	編集者・発行者	発行所	発行年月
北の子供	編集・新日本文化（1巻1号） 協会教材研究会 和田義雄（2号～2巻1号） 大野謙次（2号～3巻9号） 桜井志郎（10号～4巻4号） 名達修治（5号～5巻1号） 発行・佐藤信一（1巻1号～2号） 須田多四郎（3号～5巻1号）	新日本文化協会	1946, 4～1950, 1 38冊
おはなし	杉岡孝之編集・発行（1～25号）	自由建設社	1946, 4～1948, 8 ? 24冊 * 19号未刊
ひばり	加清保編集・発行（1～8号）	北日本社	1946, ?～1948, 9 ? 7冊 * 創刊号未確認
こども朝日 —北海道版— 北海道小学生の 自由研究	加清保編集・発行（9号） 福井文雄編集・発行 （235,237号） 今井鴻象編集・発行（1～2号）	北方書院 朝日新聞社 千代田書院	1946 ?～? 1948, 6～1948,10 ?
5			

\* ( ) は確認できた号

表 4

執筆者一覧

<p><b>北海道在住</b> 更料源蔵、八森虎太郎、高倉新一郎、吉田十四雄、諸角和儔、荒谷七生、和田徹三、加藤愛夫、早川三代治、中津川俊六、林 良應、目黒草水、高橋英衛、支部沈黙、坪松一郎、松田善雄、三浦 一、大塚みつる、松本達雄、藤田貞雄、小田邦雄、和田義雄、塚本長蔵、奥 保、小野三男治、飯田広太郎</p> <p><b>疎開作家</b> 百田宗治、木村不二男、寺島証男、原田太郎、時雨音羽、向坂隆一郎、今井鴻象、浅野晃</p> <p><b>本州在住</b> 川崎大治、石森延男、北畠八穂、北川千代、古谷綱武、竹内てるよ、丸山薫、尾崎喜八、草野心平、室生犀星、北園克衛、森荘巴池、松田垂公、巽 聖歌、工 清定</p>
<p>表表紙、挿絵、カットなど</p> <p>梁川剛一、山田義夫、能勢真美、菊池精二、本間堯彩、高橋北修、富樫正雄、国松 登、岸田賢治、今田敬一、中村篤九、清水祐幸、石川 確、新妻 清、四辻一朗など</p>

で子どもの作品を手がけたことのない作家が、執筆者に加わっていることも、この期の特徴であろう。疎開作家の中では、30冊の表紙絵

や絵物語の挿絵を描いた梁川剛一、児童詩の選評をしていた百田宗治の活躍が大きい。また、挿絵やカットを描いたのは、当時の画壇

で活躍していた画家やマンガ家達（表4）であった。

ユニークなのは地方の子ども会を援助したり、宣伝のために人形劇団「こまどり座」（1948年秋）をつくり道内を巡演したことであろう。『北の子供』については、拙文の解題を参照してほしい。（注7）童話誌『おはなし』の創刊も1946年4月で、終刊は定かでないが確認できたのは25号（1948年8月）である。編集・発行人は杉岡孝之で、自由建設社の発行。『ひばり』の創刊号はいまだに見つけられないので、創刊月日は不明である。編集・加清保、発行人・代田茂で発行所は8号まで北日本社。9号の発行は北方書院（北日本社を改称）で、玉川雄介の作品『ポンプ座と花』がタイトルになっていて、「ひばり9」はサブタイトルとなっている。両誌とも口演童話を実践・研究していた小学校教師達の発表の場としての趣が強く、執筆者も北海道童話会（のちに北海道児童文化会）の会員が多い。当時、全国的に活躍していた口演童話家の内山憲尚、安倍季雄、榎葉勇、武田雪夫等も寄稿している。

『週刊少国民』は朝日新聞社の発行で1942年の創刊、敗戦前後は合併号が続いたようだが1946年10月1日『こども朝日』と改題。北海道版は全国版に北海道で編集した色刷の4頁を加えたものであるが、記録がなく発行されていた期間については不明である。同時期の『週刊朝日』北海道版も、同じ形態で発行されたいので、これを手がかりに『こども朝日』の調査を続けたい。

この期ユニークな雑誌に、『北海道小学生の自由研究』がある。1948年9月千代田書院から創刊された。現時点では2号までしか確認できていないが、小学生による自由研究の発表の場として設けられた雑誌である。おそらく、1947年の学習指導要領（試案）の「自

由研究」に準拠して刊行されたものであろう。北海道で創られた学習誌として、また子どもの生活を知る上で貴重な資料である。

### 3. 絵 本

表5は確認できた絵本35冊の一覧である。エルム社の絵本が一番多く、うち『コーカサスのほりょ』等17冊が梁川剛一の絵による絵本である。エルム社は文具・紙等を扱っていた藤居準一と彫刻家で挿絵画家の梁川剛一、口演童話家の塚本長蔵、小学校の校長だった太田武の4人で設立したという。梁川と塚本が絵本の制作、太田が編集、藤居が販売と役割を分担していたようである。初期の絵本には印刷のズレや色調の悪さも目立つが、全体的には用紙の悪さを感じさせない仕上がりになっているものが多い。梁川剛一は、挿絵画家としての経験を十分に活かして絵本づくりをしていたことがわかる。

他に、梁川の絵本を出したのは北海道出版社である。『鉄仮面』、『岩窟王』はエルム社の絵本とは趣を異にして、大きな挿絵が6頁続き説明文はローマ字で書かれていてモダンな絵本になっている。なお、梁川剛一の札幌時代の児童文化活動については、拙文を参照してほしい。（注8）

他に、特記すべき絵本が何冊かある。北海道を代表する作家・更料源蔵と画家・国松登の絵本『夏ノ無カッタ北国』（北方出版社）もその一つである。更料の初めての童話集『北の国の物語』（1941年、大鵬社）の「氷の国に初めての夏が来た時」を絵本用書き改めたもので、アイヌ民話と思われる。国松の絵は物語の世界をのびやかに表現していて、味わい深い絵本となっている。

マンガ家・中村篤九の『青空坊っちゃん』（北桜社）は、マンガの手法を使った斬新な



表5

## 確認できた絵本一覧

(1994.11)

絵本名	文	絵	出版月日	出版社
土の唄		梁川剛一	1946. 5.	エルム社
		新妻 清		・
		野村秀雄		〃
コビトノクニ	塚本長蔵	梁川剛一	1947. 3.	〃
ピノチオ	塚本長蔵	梁川剛一	1947. 7.	〃
あいうえ王のかぎ	梁川剛一	梁川剛一	1948. 5.	〃
不屈魂	塚本長蔵	梁川剛一	1946.12.	〃
この努力この栄冠	塚本長蔵	梁川剛一	1947. 4.	〃
コーカサスのほりよ	塚本長蔵	梁川剛一	1947. 8.	〃
紅ばら白ばら	塚本長蔵	梁川剛一	1947. 8.	〃
ぼくらの放送局	塚本長蔵	梁川剛一	1947. 9.	〃
宝くらべ	塚本長蔵	梁川剛一	1948. 2.	〃
犬物語	塚本長蔵	梁川剛一	1948. 8.	〃
アリババと40人の盗賊	塚本長蔵	梁川剛一	1946.11.	〃
シンドバットの冒険	塚本長蔵	梁川剛一	1947. 1.	〃
アラジンのランプ	塚本長蔵	梁川剛一	1947.12.	〃
絵本イソップ	塚本長蔵	梁川剛一	1946. 6.	〃
イエスさまとお弟子	賀川豊彦	平沢定治	1947. 9.	北海道出版社
こどもとイエスさま	賀川豊彦	平沢定治	1948.11.	〃
岩窟王	椿 達雄	梁川剛一	1947. 4.	玄文社
鉄仮面	椿 達雄	梁川剛一	1948. 4.	〃
ヨイコノエホン	小田邦雄	山田義夫	1946. 1.	〃
雀とまり	小田邦雄	山田義夫	1946. 6.	〃
オトモダチ	加藤愛夫	山田義夫	1947. 1.	北東日本厚生協会
かちかち山	坪松一郎	高木富三夫	1948. 6.	北方出版社
ゲンキナコドモ	林 良應	山田義夫	1946.11.	北櫻社
夏ノ無カッタ北国	更科源蔵	国松 登	1946.12.	北日本社
青空坊っちゃん	中村篤九		1946. 8.	談論社
イソップえばなし	はせがわとしお		1946. 5.	新星社
仲よし倶楽部	古田久三郎		1946. 3.	〃
はちみつ坊や	唯是日出彦		1946. 4.	〃
ウサギサンノカキ	唯是日出彦		1946. 4.	〃
幸の鍵	唯是日出彦		1946. 4.	〃
耳長かあさん	唯是日出彦		1946. 6.	〃
おてがらワンちゃん	唯是日出彦		1946. 6.	〃
こぐまのテディ	唯是日出彦		1946. 6.	〃
黒い鶏	唯是日出彦		1946.11.	〃

35

構成が目をはく。敗戦直後の小学生の生活が描かれていて、子どもの生活史の資料としても注目したい。

小田邦雄の童謡集『雀とまり』（玄文社）、林良応の『ゲンキナコドモ』（北東日本厚生

協会）等の絵を描いた山田義夫の仕事も貴重である。リアリズムの鬼才といわれ、その才能を惜しまれながら夭折した画家・山田義夫は、この期に本の装丁、カット等の仕事を多く手がけたが、4冊の絵本を描いている。な

かでも、『ゲンキナコドモ』の絵は、子どもの遊ぶ姿、心の弾みをとらえて秀逸である。

キリスト教社会運動家であり、幼児教育に造詣の深かった賀川豊彦は、『イエスさまとお弟子』等（エルム社）2冊の絵本の詩文を書いている。宗教画家である平沢定治の絵は、輪郭線を取り細部を省いた紙芝居の絵を思わせる。

#### 4. 物語、その他の本

創作・物語の本は南洋一郎、寺島証夫等の冒険物を入れて21冊と、そう多くはない。（表6）他に翻訳8、民話2がある。

各社とも、シリーズものを企画していた。霞ヶ関書房のグリーン・ブック、自由建設社のおはなし文庫、白鳥社の白鳥文庫、北海道

教育文化協会の時計台文庫等である。しかし、おはなし文庫が5冊を出しただけで、いずれも1、2冊で終わっている。

特記すべきは、北海道児童文学会編の『つららの笛』（北方民生協会）である。北海道児童文学会の会員の業績の中から、28の作品が収録されている。刊行のことは「北海道に在住する、あるいは北海道に関係ある、児童文学者、児童文学に興味を持つ作家詩人教師などにより今年7月（注・1948）に創立された児童文学の研究団体であります。」（注9）とあり、和田徹三、更料源蔵、八森虎太郎、百田宗治、川崎大治、石森延男等28人の名が記されている。表紙には「年刊第1集」とあるが、その後は刊行されていない。

伝記では、池田宣政のリンカーン『荒野の

表6 確認できた物語 (1994.11)

作 品 名	著 者	出版年	発 行 年 月
少年記者プエル君	筒井敬介	1947	霞ヶ関書房
樹の上の旗	山田貞一	1947	北日本社
石狩平原の子供	坪松一郎	1946	玄文社
海のろうそく	辰木久門	1947	〃
雪むし	冬木則夫	1947	〃
無人島に生きる16人	須川邦彦	1949	札幌講談社
ユーモア学校	塚本長蔵	1947	新日本文化協会
密林王	南洋一郎	1948	〃
怪人島	寺島証夫	1948	〃
黒い朝顔	三浦 一	1946	自由建設社
怪奇黄金鳥	寺島証夫	1946	〃
ヌプリの神神	原田太郎	1947	〃
神様の手となった子供たち	木津一郎	1947	〃
新しい芽	川崎大治	1947	談論社
はる・なつ・あき・ふゆ	百田宗治	1946	白都書房
ふたつのつぼみ	石森延男	1947	自由建設社
つららの笛	北海道児童文学会	1948	北方民生協会出版部
グスベリ	石森延男	1947	北海道教育文化協会
マリオの幸福	高沢洪平	1948	最上谷書店
港の子供たち	高沢洪平	1947	室蘭児童文化協会
港の子供たちカニノアブック	大杉瓢太	1948	室蘭児童文化協会 室蘭教組室蘭支部教部
21			

風雲児』『自由の夜明け』、木村不二男の『地球の父ガリレイ』、原田太朗の『開拓の父依田勉三』等8冊が出ている。

科学読み物が18冊と多く目をひく。なかでも、科学ジャーナリスト原田三夫の『僕は原子である』、『日食の話』、加納一郎の『雪の世界』等、子供の国の出版が目立つ。講談社も多いが、ほとんどが戦前の再刊本である。

他に、歴史、考古学7、副読本9、実用書3、マンガ1がある。当時、劇団東童の宮津博の『豆の煮えるまで』——青少年脚本集は、劇団東童の劇を北海道の子どもに鑑賞させようと尽力した北方民生協会の出版である。また、子どもの詩・作文集2は、子どもの生活史・文化史の資料としても貴重なものである。

#### 5. 紙芝居

表7は、確認できた紙芝居で、前述した新日本文化協会の出版である。新日本文化協会の前身は北海道教育紙芝居協会で、戦前は北海道内の紙芝居の元締めの役割を果たしていたという。戦後、新日本文化協会と改称、出版活動等を始めた。紙芝居は、「世界名作紙芝居」全10冊として企画されたもので『北の子供』誌上に広告が掲載されている。うち6冊が出版されたようである。絵は梁川剛一で、文は塚本長蔵と武藤鉄壽、椿達彦である。武藤と椿についての詳しいことはわからないが、

武藤は新日本文化協会の専務理事であり、『北海道出版物総合目録』によると、北海道出版社の代表であったようだ。

梁川剛一が紙芝居を描いたのは、札幌時代だけであることが今回の調査でわかった。

#### IV. 札幌における児童出版物の特徴

児童出版物をジャンル別にみたが、この期の児童出版の特徴の第1は、出版物の種類、点数の多さである。未確認のものを含めると150点を越えそうだが、北海道でこのように多様な出版物が刊行されたのは、この期を除いて他にはない。

外的要因の強い出版界の活況のなかで、生まれては消えていった数々の出版社による出版物。紙質や印刷技術のまずさ、全体に粗末さが目立つが、絵本、紙芝居については丁寧な作りが多い。

第2に、児童出版物を中心に手がけた出版社——エルム社、子供の国、新日本文化協会、ともだち社は紙・文具商、印刷所の経営者と教師、文化人との連携で生まれたことである。資料が少なく児童出版社の軌跡を辿ることは難しいが、上記の出版社については携わった人々、その家族の証言で明らかになってきた。

ともだち社は、前述のように横田印刷所・横田初吉と境盛男等の教師達、エルム社は藤

表7

確認できた紙芝居

(1994.11)

作 品 名	文	絵	出版年	出 版 社
ベニスの商人	武藤鉄壽	梁川剛一	1947	新日本文化協会
アラジンのランプ	椿 達彦	梁川剛一	1948	〃
岩窟王	塚本長蔵	梁川剛一	1948	〃
宝島	椿 達彦	梁川剛一	1948	〃
ウィリアムテル	塚本長蔵	梁川剛一	1948	〃
フランダースの犬	塚本長蔵	梁川剛一	1948	〃
6				

居商店・藤居準一と挿絵画家・梁川剛一、口演童話家・塚本長蔵、子供の国は紙を扱っていた事業家・安田吉郎と科学ジャーナリスト、原田三夫、ジャーナリスト・佐藤喜一郎等の連携で出版活動を展開していた。新日本文化協会は前身の北海道教育紙芝居協会時代から理事長であった佐藤信一が、市内の文化人に呼びかけさまざまな文化活動を企画・展開したようだ。しかし、発足間もなく経営難に陥り大半の計画は挫折。その後、理事長に就任したのは、須田印刷所の経営者・須田多四郎であった。『北の子供』が創刊されて間もなくのことである。廃刊を噂されながらも、6月号が5ヶ月遅れで11月に刊行されたのだった。当初の計画にはなかった『北の子供』が、廃刊の危機に会いながら4年も続いたのは、印刷所の経営者の就任が有利に働いたに相違ない。

第3に、児童出版が地域の教育・文化活動と密接な関係にあったことを指摘できよう。新日本文化協会は1948年秋、専属の人形劇団『こまどり座』を結成、道内の巡演を始めた。『北の子供』の宣伝、読者サービスとはいえ中央で発行された雑誌には見られないことである。ラジオ以外に楽しみのなかった子どもたちに、どんなに喜ばれたことかは想像に難くない。他に、3周年記念読者会等を開催している。

こうして、読者と結びつきながらの出版活動は、子供の国にもみられる。若い社員達が読者の子どもたちとの交流を目的に『クレヨン座』を作り、デパートを借りて三越劇場を開催。仮面劇を上演し、後に専門人形劇団を結成することになる。

読者会、人形劇団などの活動は、戦前から活躍していた口演童話家、戦後活発な活動を展開していた子ども会活動のリーダーや中・高校生、アマチュア劇団の人々の協力があっ

た。一方、巡演活動を支えたのは北海道教職員組合の地方支部や炭鉱の労組等であった。このように、地域の文化活動に支えられながら出版活動を展開し、出版活動を通して地域の文化活動を支援してきたことが特徴といえよう。

## おわりに

短期間に生まれては消えていった出版社、残された出版物を辿って、出版状況や出版物についてまとめた。概略は把握できたが、細部にわたっては不明なことも多い。

今後は、資料の探索・調査、特にプランゲ文庫に所蔵されている出版物の調査を進め、全容解明にさらに近づきたいと考えている。

心よく資料を見せてくださった梁川美恵子、平沢秀和氏はじめ多くの方々、当時のお話を聞かせてくださった方々のご協力と励ましに、心から感謝いたします。

## 注

(注1) 荘司徳太郎、清水文吉著『資料年表・日配時代史——現代出版流通の原点』出版ニュース社 1980年 208頁

(注2) 前掲書 57頁

(注3) 岡野他家夫著『日本出版文化史』原書房 1981年 475～476頁

(注4) 福島鑄郎著『雑誌に見る戦後史』大月書店 1987年 42頁

(注5) 谷暎子「童話新聞『ともだち』の解題と細目」『北星学園女子短期大学紀要』第29号 1993年

(注6) 原田三夫著『思い出の70年』誠文堂新光社 1966年 361頁

(注7) 谷暎子「児童文芸雑誌『北の子供』解題(1)と細目」『北星学園女子短期大

学紀要』第27号 1991年 谷暎子「児童文  
芸雑誌『北の子供』解題(2)」『北星学  
園女子短期大学紀要』第28号 1992年  
(注8) 谷暎子『ヘカッチ』創刊号 北海道  
子どもの文化研究同人 1994年  
(注9) 北海道児童文学会編『つららの笛』  
北方民生協会 1948年 1頁

### 参考文献

にれの樹会編『北海道の児童文学』北海道  
新聞社 1979年  
福島鑄郎著『戦後雑誌発掘——焦土時代の  
精神』洋泉社 1985年  
日本児童文学者協会編『復興期の思想と文学』  
偕成社 1979年  
荘司徳太郎、清水文吉著『資料年表・日配時  
代史——現代出版流通の原点』出版ニュー  
ス社 1980年